2005年8月1日発行　昭和21年11月17日第3種郵便物認可
ISSN 0289-3517

2005年 現代農業 8月増刊

若者はなぜ、農山村に向かうのか

戦後60年の再出発

熊本県南阿蘇村の二子石敦男さん（53歳）と大津耕太さん（30歳）。大津さんは慶応大学とミュンヘン工科大学大学院で地域計画を学び、「いずれ農業をやるんだったら早いほうがいい」と、妻の愛梨さん（31歳、背表紙写真）とともに農家になった

農文協

吉田愛梨＆大津耕太

どんどん広がる「農業＝かっこいい」

ようこそ O2（オーツー）ファームの「百笑生活」へ

明るい農村づくりの火はつくか？

熊本県南阿蘇村　大津耕太＆吉田愛梨

プロローグ～不況世代の底力

「いい時代に生まれたなぁ～」と、最近よく思う。長男が農業を継ぐことが当たり前だったころ、ほかに夢がある青年にとって、農業は苦痛だっただろう。農業があまり儲からない職業になったとき、長男はその半強制的な後継義務から解放された。するとこんどは信条をもって自ら有機農業をはじめるパイオニアが登場した。「当時は勇気農業だった」という話をよく耳にする。化学肥料や殺虫剤を使うことが当たり前だった当時、周囲の理解を得るのは並たいていの苦労ではなかっただろう。

そして不況が訪れた。バブル期の職探しは過去のもの。いい大学を出ても、希望通りの職に就けず、たとえ就職しても、「終身雇用」などという概念は、はじめから私たちにはなかった。

自分は何をしてどんなふうに生きていきたいのか。

難航する就職活動のなか、そんなことをあらためて考えたことのある同世代は少なくないはずだ。これが不況のなかで育ち成人した私たち不況世代の底力となっている気がしてならない。大企業に就職することが唯一の成功ではなくなったからだ。こうなると、農業は十分魅力的な選択肢になり得る。と、少なくとも私たちはそう思っている。だから、「いい時代に生まれたなぁ～」と思うのである。

私たちが考え、選んだ生き方や暮らしぶりを見てもらうのは嬉しい。でも、自分たちの主張を切々と訴えるのは、あまり好きじゃない。だから主張ではなく、私たちの笑いに満ちた暮らしを紹介することで、似たような思いで農業に取り組んでいる全国各地の同世代の人たちに共感してもらえることができたら、何よりの幸せである。

農業ってかっこいいですよねぇ

日本の食料自給率は四〇％と世界最低水準。熊本県の農地は二三年連続で減り続けている。食料を輸入に頼って本当に安心で豊かな暮らしができるのだろうか？　そう考えたら、どうしても農業をしたくなった。農業については素人だったが、始めてみると、予想以上にいい職業だと思えてきた。「増刊現代農業」を手にしている人なら、農業がいい職業であることくらい、みな感じているように思う。だから農業のすばらしさについていまさらうんぬんするつもりはない。

それにしても農家の男は「かっこいい」。これまで日本でも外国でも、いろんな職業の人に会ってきた。その中でダントツいい顔をしているのは農家だと思う。じつはこれも、農業をしたいと思った理由のひとつ。いったいどこが魅力的なのか考えてみた。

まずはその行動力。やってみて失敗することもあるけれど、その情熱と手際といったらすごい。「もっこす（熊本弁で頑固者の意味）」だけど、何でも自分でこなしてしまう。

つぎにその寛容さと忍耐力。自然や生き物を相手にしていることで培われるものだろう。他人の失敗に対しても寛容だ。責めずに笑いながら助けてくれる。簡単なようでなかなかできないことだと思う。ましてや競争社会では、つい忘れられがちな姿勢ではないだろうか。

最後にその合理性。家ごと、作業ごとに知恵と工夫があり、それに出会うたびに感動を覚える。

ほかの職業とくらべると、社会的な評価を得にくいのが農業。でも妙な上下関係にしばられないのも農業。暮らしの基本は食べもので、いのちを育てるのが農業。「農業＝かっこいい」がどんどん広まるといいのに！

カルデラの田植え

O2ファームの農産物

ここで少し、O2ファームの紹介をしたい。九州のほぼ中央。観光地としても有名な阿蘇カルデラの中に、私たちの農場はある。南阿蘇の外輪山が背後に迫り、水源がいくつも近くにある。先祖代々続く農家を叔父（五一歳）が継いで経営していたが、そのあとの後継者は不在だった。農業に魅力を感じつつも、ゼロから始めるためには資金も根性もいる。農地や機械が一通りそろっている農場の後継者として農業を始めることができたのは、私たちが今日まで逃げ出さずにすんでいる大きな理由である。農場の名前がなかったので、昨年「O2ファーム」という愛称をつけた。

おあしす米を支えるアイガモ

おもな農産物は無農薬のお米と夏場のキュウリ。叔父一人では手が回らず、数年前にやめていた繁殖牛も、私たちが参入したことで再開した。いまは親牛だけで一四頭。すべて阿蘇名物の「あか牛」だ。お米の作付面積は全部で約三町。そのうちの半分強で、「おあしす米」という名前の無農薬米を栽培している。

「おあしす米」の名前は、おいしい・あんぜん・しんせん・すてきなお米、から来ている。名水百選にも選ばれた白川水源をはじめとする、阿蘇の伏流水で育ったコシヒカリ。阿蘇は標高が高いため、害虫が少ない。雑草はアイガモかコイで防いでいる（本誌の表紙の写真は、中干しするためにコイを田んぼから引き上げた後に撮ったもの。「コイつかみ」はたいへんな作業でした！）。

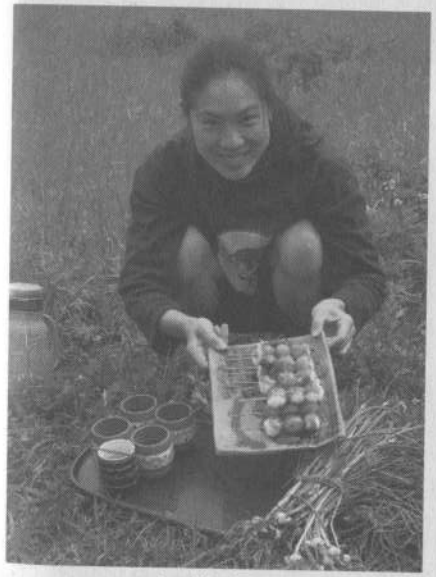
おあしす米をつくっている農家は全部で二〇軒。全国七〇〇軒以上の家庭に産直販売をしている。私たち夫婦（耕太三〇歳、愛梨三一歳）が具体的に「農業をやりたい」と思うようになったのは、おあしす米の栽培に取り組んでいる叔父がいたからだ。私たちは二人とも大学時代から環境の勉強をしていた（慶応義塾大学環境情報学部）。卒業後は、環境先進国といわれるドイツの大学院に進学（ミュンヘン工科大

学)、「明るい農村づくり」が研究のテーマだった。もともとは地域計画や環境調査が専門だったが、実際に農業もせずに農村振興を語ることに疑問を持ち始めた。本気で農業の振興を考えるなら、叔父の農業を継ぐのが一番！そんな思いがしだいに強くなっていった。押しつけられたのではなく、自分たちがやりたいと思って始めた農業。だからこそ、いつまでも楽しくやっていたい。そこで、農業や農村での暮らしをより楽しくするために、ことあるごとに自分たちなりのこだわり方を話し合ってきた。紹介するほどたいしたものではけっしてない。が、共感者がいるかもしれないという淡い期待を抱いて、本邦初公開することにした。

O2ファームの幸せ一〇カ条
～ちょっとだけこだわり

1、食へのこだわり

おいしいものを食べることがすべての基本。もともと料理好きの妻は、新鮮な材料が手に入るようになって嬉々としている。ごはんはもちろん無農薬のお米が食べ放題。野菜は畑から。季節ごとに山菜やタケノコがじいちゃんの山で採れる。あか牛の繁殖をしているので、そのうち肉も自給したいが、まだそこまでいっていない。アイガモも、今年こそは食べてみたい（去年はキツネにやられました）。味噌や豆腐づくりも始めた妻。化学調味料は使わない。「完全自給自足」に向けて、まだまだやることがいっぱい！



クズ米の団子

2、おいしく飲むことへのこだわり

消費量が多いのに、まだ全然自給できないもの――アルコール。ビールに酒に焼酎にワイン……。「収入も少ないが支出も少ない」が基本のわが家にしてみると、アルコールでの支出は手痛い。そこでわが家では、うまいコメと妻の手料理を肴にしたホームパーティをよく開く。来るときには「一本」ぶら下げてきてもらう。泊まりに来る客には、「手土産は液体で……」とささやきかける。そのかいあって、わが家の酒蔵にもだいぶストックができてきた。今年の冬あたり、庭の池から白い液体が湧き出てこないかな～。

飲むこと

寝ること

3、よく寝ることへのこだわり

健康な生活に、睡眠は欠かせない。農業を始めて、「昼寝」の魅力にあらためて気づいた。早起きしても、昼寝があれば元気が取り戻せる。布団に寝ると復帰できなくなるので、畳の上でゴロン。風通しのよさにだけは絶対的な自信があるわが家（築一二〇年）。昼寝のない生活なんて、いまさら想像できない。

問題は冬。夏が涼しい分、冬の冷え方も半端じゃない。昨年はついに家の中にテントを張って寝たほどだ。そんなときは、寝る。布団が一番暖かいので、究極の「省エネ」対策だ。冬眠ができたら便利なのに……。

4、身近な環境へのこだわり

ここまで書いてきて、わが家のこだわりは一次欲求ばかりだということに気づいてしまった。寝る、の次は「排

泄する」と書かなければいけない気さえしてきた。いやいや、もっと高尚な「こだわり」があるのだ。それは、ゴミを増やさないこと。プラスチック製品はまず買わない。何でもまずは自分でつくってみることにしている。どうしてもつくれないものは、よーく吟味して買う。だから捨てない。洗濯は高くついても石けんを。何しろこのへんには下水処理場がないのだ！　最近いちばん気になっているのは農業資材のゴミ。肥料袋、ハウスのビニール、マルチ……。どうにかゴミを減らせないものだろうか。

5、ゆとりへのこだわり～GDH（GDHappiness）

収入は都会で暮らす同級生にくらべると少ないかもしれない。いや、少ない。その代わり支出もストレスも極端に少ない。時間や環境など、お金では買えない貴重なものが田舎にはある。これが、ゆとり。ゆとりをなくしたら、農村はたんなる不便なところと化してしまう。農業で高収入を上げている人もたくさんいる。すごいなぁ、と思う。が、収入を上げるために「ゆとり」を失うのであれば、私たちは低収入でも生きていける方法を考えよう。これが、生産量（GDP）の代わりに注目されている幸福度（GDHappiness）。もちろん、ゆとりがあって収入も上がるなら、やぶさかでないが。

築120年のゆとり

6、ものずきな手間暮らしへのこだわり

「手間」と「時間」のかかるわが家の暮らし。冬の朝はストーブの薪に火を点けてから、菜園に味噌汁の具を採りに行く。そんな暮らしを見て「スローライフだね」とうらやむ友人。いや、忙しいって。コンビニで弁当を買ってきて、ファンヒーターのスイッチを入れれば、あっという間に食事の仕度が終わる。余った時間をのんびりと過ごせれば、こっちの方がずっと「スロー」なのでは……？　「スローライフ」の日本語訳は、「手間暮らし」だと思う。ゆとりがあれば、その手間こそが楽しい。楽しみながらなら、薪割りもいいものだ。

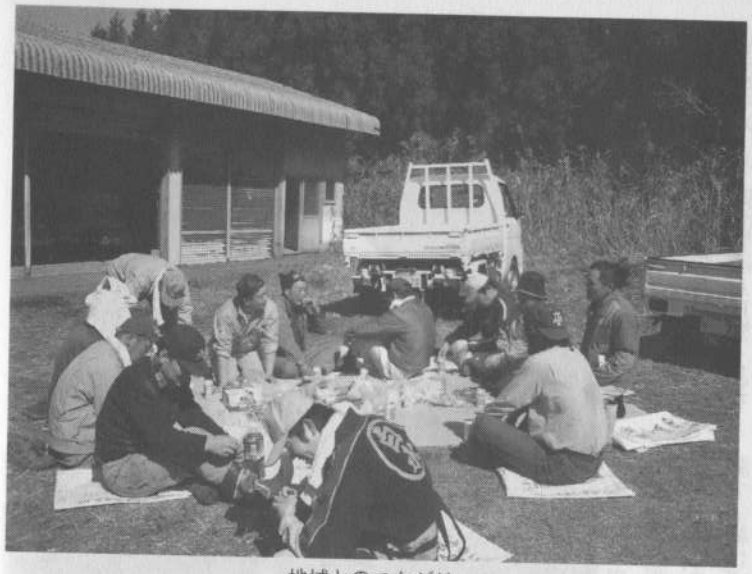
7、多様性へのこだわり

夫婦そろって血液型はAB型。どちらも多様性を好み、切り替えが早い。仕事も、遊びも、ケンカも。そう考えると、多様な仕事をこなす「百姓」は、あんがい天職なのかもしれない。農業のほかに、専門を生かした環境や通訳・翻訳の仕事もしているが、どちらの仕事もえてして単調で、続けているとどうしても飽きてくる。だからこそ、切り替える。農閑期や昼の暑い時間は家でパソコンをつかった仕事。農作業の合間を縫って旅に

薪割り

手間暮らしでつくった本棚

も出かける。この多様性と切り替えは、田舎暮らしを楽しむコツだと思っている。



地域とのつながり

地域の子どもたちとも楽しさを共有

8、地域社会へのこだわり～近所の人を飽きさせない！

農業をすると決めたとき、「海外の大学院まで出てなんで？」と周囲からは不安がられ、反対もされた。地域の人たちは若者が増えたことを喜ぶ反面、本当に農業で食べていくつもりなのか不思議そうに見ている。そんな私たちの暮らしぶりは、よく近所の人の話題になるらしい。腕を組んで歩けば何週間も冷やかされ、草刈りをしていると「大学では習わなかったろ」とニヤニヤ。いつでも誰かが見ている。逆に言えば、分からないことがあったとき、聞ける人がたくさんそばにいる。ここには都会で失われた地域のつながりが色濃く残っている。大事にしていきたいもののひとつだ。

9、遊びへのこだわり

昔は「遊ぶこと＝悪いこと」だった。「遊んでばかりいて……」とか「遊ぶ暇があったら……」という表現からも分かる。が、時代は変わった。能率よく仕事を続けるためには遊びも大事。遊ぶときは仕事のことは忘れなければ意味がない。近所に遊び仲間ができたことは、私たちにとっては大きな財産を得たに等しかった。そんな仲間たちと「南阿蘇ランドアートクラブ」というサークルをつくった。自然にあるものを使って遊んだり、工作したりしてみようというサークル。お金がかからなくて、創造性に富む遊び。わが家にぴったり！

10、楽しさを共有することへのこだわり

自分たちだけが楽しむのではなく、訪れた人やまわりの人と楽しみを共有できたらなお楽しい。そんな思いで、昨年から農作業の体験受け入れを始めた。「農業って楽しい」ということを、言葉で伝えるのではなく、一緒に感じてもらえれば……。小学生からおとなまで、いろんな人がいろんな季節にやってくる。受け入れは準備などが必要なこともあって思ったよりたいへんだが、続けていきたいと思っている。近所の子どもたちと農作業をするのも楽しい。農村育ちといえども、家が農家でない限り、あまり農業にふれる機会がないのだ。都会の子たちと同じように、きゃっきゃと喜びながら作業をしている。能率は下がるけれど、かけがえのない時間でもある。

O2ファームの暮らしと出来事

南阿蘇で暮らし始めてまる三年。とにかく、日々いろんなことが起きる。農業とは直接関係ないが、私たちの暮らしを象徴するようなエピソードをいくつか紹介したい。

▼キョーサイ組合

引っ越して来てすぐ、「コータ君、キョーサイ組合に入らんね？」と役場に勤める友人から誘われた。最初は保険の勧誘かなにかだと思い、慎重に答える。それでなくとも地域の青壮年部や営農組合、消防団に隣組など、いろいろな組織があって、よく分からない。その上メンバーはだいたい同じで、とまどっている矢先だった。

「じつは、村にはキョーサイ組合てい

うのがあってね……」。続ける友人。思い切って「どんな組合?」とズバリ聞いてみた。友人はにっこり笑って、字を書いて見せた。「強妻」組合。最近は「強い」が「恐ろしい」になっているらしい。もちろん、すぐに入会。見わたせばなるほど、わがムラは女性が元気だ。夏祭りや運動会など、中心となって地域を元気にしている。それを「強い」と表現するのであれば、たしかにみな強い。村が元気な証拠でもある。

キョーサイ組合

ところで、キョーサイ組合に自分から入ることはできない。人から「お宅も……」と肩を叩かれて、はじめて入ることができる。それにしても引っ越し早々声をかけられたうちっていったい……!?

▼公民館に太陽光発電設置!

わが家から歩いて五分くらいのところに公民館がある。老朽化のため、昨年建てかえることになった。おりしも町村合併を目前にして、奇跡的に残っていた竹下内閣時代の「ふるさと創生基金」が各地区にふり分けられることになった。その額約三〇〇万円。何に使うかは、各地区に任された。うちの地区では公民館の建てかえと時期が重なったため、備品を購入しようという案がまずは出た。冷蔵庫、テレビ、エアコン……!?待てよ、そんなもの公民館には要らないのでは? 夏が涼しい阿蘇地区では、エアコンのない家庭も多い。わが家にはもちろん、ない。次にフェンスをつける、外灯を増やすなどの案が出てきた。でもせっかくの「ふるさと創生基金」を当てるにはどうももったいない。そこで私たちが考えたのが、太陽光発電だった。

ふつう太陽光発電を設置する場合、月々の電気料金を考えて、初期費用を回収するまでに何年くらいかかるかを計算する。二〇年くらいかかることもざらにあるため、設置するにはそれなりの思い切った決断が必要となる。が、今回の場合、設置費用は負担しなくていい。そのうえ公民館はあまり電気を使わないため、余った電気は売ることもできるはず。売上げを公民館の維持

費に当てることも夢ではない。

しかし私たちはまだ新参者。お金の用途を決める話し合いなどでの議決権はもっていない。そこで、役員をしている近所の兄貴分に相談をしてみたところ、「こういうアイディアを待っていた!」とさっそく乗り気。あとは怪訝な顔をするご老人たちの説得から、業者の選択、設置の段取りまですべて取り仕切ってくれた。かくしてわが地区の公民館にはピカピカと光る太陽光発電装置が設置された。小さな村の小さな地区の公民館。私たちの誇りになりそうだ。

▼ヨハナさん

半世紀ほど前、私たちが住む家にドイツ人が住んでいた。戦前からドイツで暮らしていたこの家のご主人は、向こうで出会ったヨハナという女性と結婚した。戦況が悪化したため、彼女を連れてシベリア鉄道で帰国。村では「ハナ子さん」とか「おハナさん」と

ドイツ人がやってきた

呼ばれて親しまれていたそうだ。

この家を片づけると、ヨハナさんのものらしいドイツ語の手紙や本が出てきた。たまたまドイツ語が分かる私たちはなにか使命のようなものを感じ、昨年の農閑期に引き受けたドイツでの仕事を終えると、彼女の親戚探しにとりかかった。

手がかりは古いアルバムと、無作為に選んだ二通の手紙。写真にはカタカナで人物名が書かれているが、苗字は分からない。手紙は旧字体でほとんど解読できない。雲をつかむような「調査」が始まった。

レンタカーを借りて、消印のあった小さな村を訪れる。そこでの聞き込みから、ようやくひとりの人物のフルネームが分かった。インターネットで検索すると、同姓同名は六〇名弱。帰国まではあと二日ある。できることはすべてやろう。そう覚悟を決めて、片端から電話をかけること数十分。ヨハナさんの甥子さんがついに見つかった！

その甥子さんの娘が先月ここを訪れた。ヨハナさんの親戚がムラに来るのは初めてである。墓参りがすむと、近所から人が集まってきた。ヨハナさんが当時は珍しかったパンやケーキを焼いてくれた話、体格がよくて汲んだ水を軽々運んでいた話……。初めて聞く大叔母の話を、彼女は熱心に聞いていた。半世紀ぶりに復活した親戚づきあい。ヨハナさんもきっと喜んでくれているだろう。

広島の中学生と

▼広島の中学生がやって来た

今年の五月、広島の安佐中学校から男の子が四人、泊まりに来た。いっぷう変わった修学旅行で、生徒は全員地元農家の家に泊まる。農作業体験は昼間のうちにほかの農家ですませており、宿泊する農家の家には夕方やってきて、翌朝早くに帰ってしまう。「一緒に食事をして温泉でも連れて行ってあげてください」と言われていたが、それじゃぁ何ともつまらない。

ちょうどその日は満月。旧暦に関心のある私たちは、満月にはふだんからいろいろなイベントをする。おもにキュ

ウリ畑や棚田でお月見をしながらの酒盛り。今回は、中学生男子四人を連れて「オトコのナイト・ハイキング」をする計画をたてた。登山部出身の友人を誘って、バーベキューが終わった夜八時過ぎから外輪山に登り始める。峠までは約二時間。一日中農作業やら観光をしていた中学生たちは、「キツイ」「まだぁ？」と口ではフーフー言いながらも、なるようになれと腹をくくっているのか、足だけはしっかり前に出る。寺の横を過ぎるときに友人が怪談話をすると目がキラキラしてきた。

ようやく峠にたどり着いたとき、軽トラックに温泉を積んで登って来た妻が合流した。近所の温泉では、一〇〇リットル一〇〇円で温泉のお湯を販売している。二〇〇リットルも買ってくれば風呂桶がいっぱいになり、このへんの人は家でも温泉が楽しめる。

軽トラックの後ろにブルーシートを広げて、タンクの蛇口をひねる。浅いのが難点だが、湯温は高くて立派な露天風呂になった。さしずめ半身浴というところか。登山でかいた汗を野外の露天風呂で流すというこの幸せ！中学生にとっても、忘れられない体験になったに違いない。

O2ファームが明るい農村づくりの火をつける

私たちがドイツの大学院で勉強したのは、「明るい農村づくり」。正確に言えば、持続可能な農村のあり方についての勉強だった。学んだことはいくつもあるが、そのひとつが「火つけ役」の存在。農村の今後を誰よりも考えているのは、学者でも行政でもなく、地元住民だ。

「もっと住みやすく」「いつまでも豊かな農村で」といった願いは、どこでも共通している。その秘めた思いが現実につながるかどうか。それは火つけ役の有無による、というのだ。火つけ役とは、具体的なアイディアを出したり、行動を起こしたりする人。そういう人が一人でもいれば、明るい農村づくりは始まる。何人もいれば、なおよい。私たち夫婦は新参者ではあるが、祖父母や叔父がいるという点で地域への思い入れは強い。火つけ役になるために温めているアイディアの一端を紹介してみようと思う。

▼Ｂａｒプロジェクト

若者どうしで飲みながら「何が不足してるか」を考えてみた。「歩いて飲みに行けるところがない」という意見に皆がうなずいた。飲みながら考えたから、そんな意見が出たのかもしれない。かっこいい、バーなんかいいね、と一同。規格外の野菜でツマミをつくる。季節の野菜や果物でカクテルもつくる。明るい農村づくりは地元住民のニーズから。自分たちが住みつづけたいところを真剣に考えたら、バーが浮かんできた。どうにかして実現していきたいと思い、妻と企画書を書いて民

間の補助事業に応募中だ。加工場を兼ねた地元バーを「増刊現代農業」で紹介できる日は来るのだろうか!?

▼エネルギー自給

せっかく環境にやさしい農業をしているのに、資源だけはジャンジャン使う。トラクターの燃料、農業資材、電気牧柵……。安全な農産物の次は、エネルギーの自給をめざしたい。ここ数年で全国に広がっている「菜の花プロジェクト」は、使用済みの天ぷら油を軽油代替燃料にする取り組みだ。休耕地にナタネを植えれば、完全に循環させることもできる。私たちの「おあしす米生産者組合」は、昨年の秋にその菜の花プロジェクトを視察した。今年の秋にはナタネを植える計画を立てている。エネルギーの自給に向けた第一歩となるだろう。

▼ススキの流通

阿蘇の草原は、日本一の面積を誇るが、維持管理に手間がかかるため、年々面積が減っている。阿蘇が草原を失うと大事な観光資源をなくすばかりでなく、草原でしか生息できない動植物が行き場をなくす。一方、じつは阿蘇のススキに対する潜在的な需要は高い。どうにかススキを商品化して特産物にできないか。妻は数年前からそんな思いを実現するためのNPO活動に取り組んでいる（NPO法人九州バイオマスフォーラムの草資源流通センター）。昨年度は経済産業省の「環境コミュニティビジネス支援事業」という補助事業に採択され、調査や実験に取り組んでいた。今年も同じ事業に採択されたよう

NPOでススキの流通促進

で、引き続きススキの流通促進に向けた取り組みを進めるようだ。農作業が忙しいときに出かけることもあって喧嘩のタネになることもあるが、明るい農村づくりのためにはぜひ頑張って欲しい。

エピローグ～ヨメから一言

東京育ちのひとりっ子。夫の就農もさることながら、周囲の人はいつ私が逃げ出すかを心配していたそうだ。なかには賭けをするものもあったとか!?そんな周囲の不安をよそに、私はいまの暮らしに大満足。季節感のある暮らし、地域とのつながりがある暮らし、なにより「農」のある暮らし。作物ができたときの喜びは何物にも代えがたい。

農業を始めてから、夫がとても頼もしくなった。夫が目標にしている農家の男性たちは、女の私から見てもじつにかっこいい。ひいき目もあるだろうが、そんな男性に夫もなりつつある。女性もまたステキだ。いつもとびきりの笑顔でトラクターに乗っているおばあさんが近所にいる。そんなステキな彼女にあこがれてトラクターの練習を始めたはいいが、操作に夢中でなかなか笑顔になれない。「よかオナゴ」への道は遠いなぁ……。

農業はキツイというが、他の仕事だってそれぞれキツイ。会社に勤めている友人たちなど、よほどきつそうに見えてならない。農家にはいやな上司もいないし、満員電車で通勤する必要もない。夫婦がいつも一緒にいられるのもいい。農家のヨメでよかった。つくづくそう思う毎日である（たんにめでたいのかも）。本稿を目にした方が、「お、楽しそうにやってるな！」と思ってくれれば幸いです。ホームページやブログもぜひご覧ください。

「よかオナゴ」への道

■O2ファーム　〒八六九―一五〇一
熊本県阿蘇郡南阿蘇村両併五八九　電話・FAX〇九六七―六二―三七三〇
http://www.aso.ne.jp/~reisi/